

(資料1) 詩集『二十億光年の孤独』から 1952 (昭和27)

21歳

かなしみ

それはまつたくたしかなことだ

あの青い空の波の音が聞えるあたりに

万有引力とは

何かとんでもないおとし物を

ひき合う孤独の力である

僕は生きてしまつたらしい

宇宙はひずんでいる

それ故みんなはもとめ合う

透明な過去の駅で

遺失物係の前に立つたら

宇宙はどンドン膨んでゆく

僕は余計に悲しくなつてしまつた

それ故みんなは不安である

はる

二十億光年の孤独に

僕は思わずくしやみをした

はなをこえて

しろいくもが

くもをこえて

ふかいそらが

ネロ

—愛された小さな犬に

はなをこえ

くもをこえ

そらをこえ

わたしはいつまでものぼつてゆける

お前の舌

お前の眼

お前の唇

お前の寝姿が

今はつきりと僕の前によみがえる

お前はたつた二回程夏を知つただけだつた

僕はもう十八回の夏を知っている

そして今僕は自分のや又自分のでないいろいろの夏を思い出して

いる

メゾンラフィットの夏

淀の夏

ウイリアムスバーク橋の夏

オランの夏

そして僕は考える

人間はいつたいもう何回位の夏を知っているのだろうか

(或はネリリし

しかしときどき地球に仲間を欲しがつたりする

二十億光年の孤独

人類は小さな球の上で

眠り起きそして働き

ときどき火星に仲間を欲しがつたりする

火星人は小さな球の上で

何をしてるか 僕は知らない

(或はネリリし キルルし ハララしているか)

しかしときどき地球に仲間を欲しがつたりする

(資料2) 詩集『21』から 1962 (昭和37)

31歳

長すぎるリフ

い

ろ

ひとりの女を見る

ひとりの女を見る

大きな夏の帽子のかけからこつちを見ている

それは私の祖母

女の背後の水木を見る

とうに死に絶えた爬虫類の

その幹のこぶこぶを見る

巨大な澄んだ眼を見る

走ってゆく子供用自転車
落ちてくる噴水

海中を沈んでゆく帆船の
潮の流れにゆらめく大三角帆を見る

とどまろうとせぬすべてを見る

整列した近衛兵

とろこわされる銅像

かれらの歌い骸骨を見る

足元の蟻

耕された石の丘を見る

蟻の運んでゆく蟻の死骸

焼けただれたその同じ丘を見る

差し出される手を見る

血ののぼる頬

その手の上の木もれ陽と

開かれる肉体

開かれたカードを見る

祭の雑踏の中

私の輝かしい勝利を

メドウサの首を見る

鳥羽 1

何ひとつ書く事はない
私の肉体は陽にさらされている
私の妻は美しい
私の子供たちは健康だ

本当の事を云おうか
詩人のふりはしてるが
私は詩人ではない

私は造られそしてここに放置されている
岩の間にほら太陽があんなに落ちて
海はかえって昏い

この白昼の静寂のほかに
君に告げたい事はない
たとえ君がその国で血を流してしようと
ああこの不変の眩しさ!

鳥羽 2

この時を永遠にしようとは思わない
この時はこの時で結構だ
私にも刹那をおのがものにするだけの才覚はある
既にいま陽は動いている

というその言葉も
砂の上に書いたにすぎない
それも指でではなく
すぐに不気嫌になる上気嫌な心で

子供は私に似ている
子供は私に似ていない
どちらも私を喜ばせる

貝殻と小石と壊の破片と
そのように硬くそして脆く
私の心も星の波打際にくらがっている

鳥羽 3

粗朶拾う老婆の見ているのは砂
ホテルの窓から私の見ているのは水平線
餓えながら生きてきた人よ
私を拷問するがいい

私はいつも満腹して生きてきて
今もげっぷしている
私はせめて憎しみに傾けたい

老婆よ 私の言葉があなたに何になる
もう何も償おうとは思わない
私を縫るのはあなたの手にある
あなたの見ない水平線だ

かすかにクレメンティのソナチネが聞こえる
誰も私に語りかけない
なんと深い寛き

鳥羽 4

自分の唾が気管に入りかけ
ひとしきり烈しくむせかえる
こうして死ぬこともあるのかしら

言葉で先取りすることのできぬものが
海から私の心へ忍び入る
私の分厚な詩集が灰になる

私は目の前の岩を眺める
松を眺める
眺めることに縋りつく
どんな表現への欲望ももてずに

何の詩もないのに
何の音楽もないのに
心にひとつのリズムが現れ
眼に涙が浮かぼうとしている

鳥羽 5

そう書いた
舌足らずのその言葉が
私の何にふさわしかったというのか

書き得ぬものは知っている
書き得たものは知らない
一艘の舟が沖から戻ってくる
舟子は見えない

言葉は風にならない
言葉は紙にならない
私にのらない

もう問いかけはすまい
答えよう 我と我が身に
私にむけられる怨嗟があるとすれば
それは無言の他にない

鳥羽 6

海という
この一語にさえいつわりは在る
けれどなおも私は云いつのる
嵐の前の立ち騒ぐ浪にむかって

海よ……
そうして私が絶句した
そのあとのくらがりに 妻よ
お前の陽に灼けた腕を伸ばせ

何の嘘も要らぬお前からだ
口が口を封じる
匂いのないすべる汗

だが人は呻く
呻きは既に喃語へと変る
熱い耳に海よりも間近に

鳥羽 7

口はすねたように嚙んだまま
またしても私の犯す言葉の不正
その罰として
終夜聞く潮騒

すべての詩は美辞麗句
そう書いて
なお書き継ぐ

夜半に突然目を覚まし
ひとしきり嘔り泣く私の幼い娘
私は正直になりたい

瀕死の兵士すら正直ではない
煙草の火が膝に落ちる
もう夢を見る事もなからう
こんなに睡いのだが

鳥羽 8

屋になれば
これが優れた詩でない事が分るだろう
だが私は私の文字を消す事が出来ない
人々が市場へと集る時に
私は卓上の水を飲み
その他に何もしていない

かなた木の間がくれのプールサイドに
白い彫像が立っている
あれが私だ
あらわな畢丸を人目にさらして

模倣に模倣をかさねて
私は成った
オルフェとは似ても似つかぬ
石塊に

模倣に模倣をかさねて
私は成った
オルフェとは似ても似つかぬ
石塊に

鳥羽 9

そっと
どんなにそっと歩いて音を立ててしまふ
こんなに深い絨毯の上で

これもまた何者かからの伝言
囁きともいえず囁き
この音もまた言葉

機械の軋みにもつんぼになった事はない
けれど今
私は耳をおおう
かたく両手で

するとなお大きく
人の血のめぐる音が聞こえる
私に語りかける声が聞こえる
限りなく平靜な声が

鳥羽 10

出発の朝
途切れることのない家族の饒舌に混る
ひとつふたつの土地の訛り

風は私の内心から吹いてくる
鳥羽は既に一望の荒野
乾いた菓子的一片すら
犠牲の上にはしかあり得なかった

書きかけて忘れてしまった一行を
思い出したい
一語すら惜しみ
私は言葉の受肉を待ちうける

眼を射る逆光
途絶えぬ松籟
どんな粉本もない

鳥羽 addendum

今 靈感が追い越してゆく
私に僅かな言葉を遺して
何事かを伝えるためではない
言葉は幼児のようにもがいている

言葉への旅は
火星への旅ほどに遠く頼りない
ともすれば私を襲う真空の
深いとどろき

そして初めて私に投げられる
白骨の君の言葉
それは

それを私は思いつく事が出来ぬ

美しい絵葉書に
書くことがない

私はいま ここにいる

冷いコーヒーがおいしい

母のはいった菓子がおいしい

町を流れる河の名は何だったろう

あんなにゆるやかに

ここにいま 私はいる

ほんとうにここに居るから

ここに居るような気がしないだけ

記憶の中でなら

話すこともできるのに

いまはただここに

私はいる

夕食が

車の窓をたたいて喚いた
通せぬ言葉とてなかった
オステイア

泥に埋まる泥の壁

涸れた井戸

松毬

其所は此処

余所ではない此処

乞食の此処私の此処

私は此処

逃れるすべはない

青空にすら

人の手はとうに触れている

地平線へ一筋に道はのびている

何も感じない事は苦しい

ふり返ると

地平線から一筋に道は来ていた

風景は大きいのか小さいのか分らなかつた

それは私の眼にうつり

それはそれだけの物であつた

世界だったのかそれは

私だったのか

今も無言で

そしてもう私は

私はどうでもいい

無言の中心に到るのに

自分の言葉は邪魔なんだ

一枚の絵葉書を見る

思い出ではない

今でもない

時

心は透けている

心の向こうに海が見える

暗くもなく眩くもなく

さえぎるな

言葉!

私と海の間を

こめかみに

一粒の汗

地名の

なんという明晰

(「旅」588省略)

北川透著『谷川俊太郎の世界』(思潮社)

「宿命の幻と沈黙の世界」後半抜粋

谷川俊太郎の現在

ところで、この平衡感覚は、一九六六年から、六八年にかけて、連作として発表されているすぐれた抒情詩の世界である「鳥羽」「旅」「Anthony」では、存在の危機がつきあげてくるものななかで、大きくゆらいでいるようにわたしには思える。

口はすねたように喋んだまま

またしても私の犯す言葉の不正

その罰として

終夜聞く潮騒

すべての詩は美辞麗句

そう書いて

なお書き継ぐ

夜半に突然目を覚まし

ひとしきり嘔り泣く私の幼い娘

私は正直になりたい

瀕死の兵士すら正直ではない

煙草の火が膝に落ちる

もう夢を見る事もなからう

こんなに睡いのだが

(「鳥羽7」)

戦後の詩の流れにおいて、これほど痛切な直截性において、抒情詩が書かれたことはないだろう。この連作のなかでは、どの作品においても、ことばは危機に見舞われている詩人の存在の底部を浚うようにして鋭く研がれ、暗い光を反射している。ここでは、夢のレアリティ、いいかえれば、ことばの仮構性が徹底して疑い抜かれている。それをわたしは、ことばからの回避を強いられていると別のところに書いたが、その回避を成り立たせているのは、沈黙のレアリティというふうなものである。この作品でも「その罰として」終夜聞く潮騒、「夜半に突然目を覚まし」ひとしきり嘔り泣く私の幼い娘「煙草の火が膝に落ちる」等の詩句がみごとに表象しているものは、沈黙のレアリティというふうなものである。「潮騒」とか幼い娘の嘔り泣く声というふうなものは、外的な自然であり、あるいは、自分の血のつながった肉身への愛というような意識の自然性をあらわしており、そのいわば自然性のもっている沈黙の深さが言語の世界の仮構性を圧倒するのである。このことは次のような作品ではいっそう顕著である。

海という
この一語にさえいつわりは在る
けれどなおも私は云いつのる
嵐の前の立ち騒ぐ浪にむかって
海よ……………
そうして私が絶句した
そのあとのくらがりに 妻よ
お前の陽に灼けた腕を伸ばせ

(「鳥羽6」)

つまり、海という一語も、「立ち騒ぐ浪」というような外的な自然のもつ沈黙の深さの前ではそれぞらしい「いつわり」のひびきしかたでない、そしてその外的な自然に向けられた視線はそのまま、妻の「陽に灼けた腕」に注がれようとする。それは妻への愛という意識の自然性への眼差でもある。外側と内側の自然に向けられた沈黙の深さの前で詩人は「絶句」するいがいないのである。むしろ、沈黙のレアリティのこのような優位は、この詩人が、書く行為のうちに一貫して主題としている生と言葉の関係が大きな危機をむかえていることを示している。わたしが平衡感覚がゆらいでいるという理由がそこにある。ところで、ことばとは、そこに幻想としての人間の主体の確立が賭けられているのだから、このようにことばが解体していくとは、人間の主体(自我)の解体を意味するのである。そして、いわばそのような解体した人間存在への認識を媒介にして、言語への仮構の新しき意志が成り立つ時、そこにまた人間存在の回復が賭けられたことばの自立的レアリティの成立が予測されるにちがいない。

すでに谷川俊太郎は、この『旅』の世界と接続する形で、先にみた「すべってゆく視線の思い出」等の、「宿命の幻」の世界を成り立たせている。それに詩集『21』の多様な方法的な試み、さらに、時事詩『落首九十九』の世界をも考え合わせるとき、もし、そこでの豊かな方法への模索が、この『旅』の世界の痛切な存在認識に媒介されて創出されてくるならば、わたしたちは、戦後の詩の概念を越える恐るべき詩の世界を望みみることになるかも知れない。谷川俊太郎は、すぐれた抒情詩人であるが、しかし、すでにみてきたように、すぐれた反抒情的な世界をも構築してきている。そこにまた、この詩人の渦動があるのである。わたしもまた彼の抒情詩を愛するものであるが、それにもまして、生と言葉の関係における詩の渦動の深い激化の上にこそわたしの期待をおきたいと思う。